

自然遊学館だより

1999春号 (No. 17)

1999. 3. 26

シリーズ『貝塚の昆虫(12)』

トンボ池のヨシウスオビカザリバ

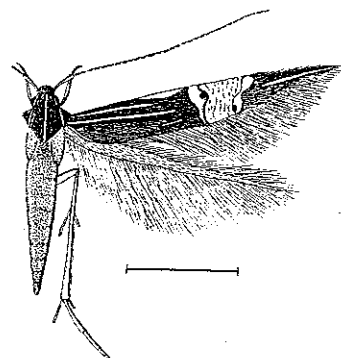
昨年8月29日、市民の森に作られたトンボ池を見回っていたところ、ヨシの葉にカザリバガ科特有のサイン（潜りあと）を発見した。すでに中の幼虫はさなぎになっていたののでシャーレに入れておいたところ、9月3日成虫が羽化し、ヨシウスオビカザリバ (*Cosmopterix lienigiella* Zeller) であることが分かった。このガははねを広げて10~12mm程の小さなガであるが、前ばねにはオリーブ褐色の地色に、内・外側を銀紋に囲まれた黄土色の横帯と白色縦線が走り美しく可憐である。

この小さなガはヨーロッパにも産するもので、この種については、かつて（今から27年前）ヨーロッパに遊学した折りの思い出がある。1971年の10月3日、Dr. Bradleyに誘われ、数人でロンドン近郊に昆虫の観察、採集に行った時のことである。ロンドンを出発した早朝は、一帯は名物の霧にスッポリ包まれ、ポプラ並木も景色もシルエットの様。車はすべてライトをつけなければ走れない。程なく霧も上がり、朝の日のなかに農村の景色が浮かび上がる。ケンブリッジ大学に行く道を見、広々とした畑のなかを暫く走り、約2時間でチップンハムという田舎町に着いた。こ

の付近には、その地の昔からの林が帯状に、人手がほとんど入らない状態で保護、保存されている。話によると、この辺は200年前までは一面の森林であったが、100年位前から開拓が進み、現在はずかには帯状に残るのみとなってしまったということである。

Mr. Emmetの虫の説明を一くさり聞く。彼はこの林の昆虫に精通していて、このカエデにはハマキホソガ (*Caloptilia*) の何という種がいるということで、探してみると、ちゃんと三角形に葉を折りたたんだ幼虫の隠れ家が見つかるといった調子である。古風なレストランで昼食後、午後はヨシ原で採集。この時、運よく私が最初にヨシウスオビカザリバの幼虫の入ったサインを発見した。Emmet に示すと、彼は狂ったように辺りを歩き回って探したが、めざす幼虫は見つからなかった。そこで私は「今回私は旅行者の身分。飼育はむづかしいので幼虫をプレゼントしましょう」ということで、彼に幼虫を進呈したという思い出のある虫である。 (黒子 浩)

ヨシウスオビカザリバ♂
(スケール12mm)



貝塚市のオオミノガ 調査

近年オオミノガの姿が消えた！今まで秋にはカキノキやサクラの梢にぶら下がったミノムシの姿が沢山見られたのに、4～5年前頃からめっきり少なくなった。これには訳がある。ミノムシの体に中国原産のヤドリバエ科の一種 (*Nealsomyia rufella*) が寄生し、幼虫の中身を食べてしまうからなのである。寄生を受けたミノムシのミノをはさみで縦に切り開いてみると、寄生されたミノには幼虫の死骸と共に楕円形をしたハエのさなぎ殻（囲よう殻）がつまっている。福岡市内ではこのハエの寄生率は90%をこえるといわれるし、堺市内（山本博子さんの自宅）ではほとんど100%であったという。

さて、わが貝塚ではどうであろうかということで、昨年（1998年）の春、市民にミノムシのミノを採集し遊学館に届けてくれるよう、3月の会報で呼びかけたところ、市内の各所および泉佐野市から材料が送られてきた。その数は、オオミノガ35個、チャミノガ120個であった。このうちオオミノガのミノが得られた地域と個数（カッコ内）は、貝塚中央線（1）、千石荘養護学校付近（9）、第4中学校（橋本）横の池（1）、浦田（3）、半田（3）、二色府公園（2）、近木会館（近木）道路沿いの木（2）、この他泉佐野市高松北（14）。寄主植物はトウカエデ、ソメイヨシノ、カイヅカイブキ、イロハモミジ、ハリエンジュ、ウメ、キリ、カキノキなど様々であったが、ソメイヨシノ、カキノキが多い

ようであった。

オオミノガのミノ35個の内訳は別表の様であるが、ミノが古く空のもの、幼虫が死亡しているもの、♀のさなぎの殻を含むもののミノはかなり古いものと思われるので調査数から省いた。したがって1997年のハエの寄生率は16/19すなわち84%強となる。羽化した3頭のオオミノガはすべて♂で、2頭は千石荘養護学校付近で採ったものであり、他の1頭は半田のものである。寄生を受けたミノの中の囲よう殻数は2～13個で、かなりばらつきがあった。数値の集計は遊学館スタッフ白木江都子氏によりなされた。また、調査にあたりご協力下さった市民の方々に合わせて謝意を表す。なお、ヤドリバエの成虫はまだ得られていないので種名の確認はなされていない。大阪のオオミノガの変遷については「Nature Study 44(2):3-6, 1998（山本、金沢、中谷、公園のミノムシ界の異変—消えたオオミノガ）」を参照されたい。（黒子 浩）

オオミノガのミノの内訳

ミノ内の状態	ミノの数
ミノが古く、からのもの	9
幼虫の死亡したもの	6
♀のさなぎの殻を含むもの	1
ヤドリバエの囲よう殻あり	16
♂成虫の羽化したもの	3
合計	35

西村氏採集の標本の 寄贈

昨年11月23日西村恒一氏より、貝塚市和泉葛城山およびその他の地で採集された42個体の標本の寄贈があった。和泉葛城山におけるミヤマカラスアゲハ、ヒオドシチョウ、イシガケチョウ、枚岡公園におけるオオムラサキの記録は共に貴重なものである。

アゲハチョウ科

ナミアゲハ：1♂，水間公園，30. IV. 1994.
クロアゲハ：1♂，和泉葛城山，28. VI. 1998.
ミヤマカラスアゲハ：1♂，和泉葛城山，4. VII. 1998；3♂，兵庫県宍粟郡，波賀町，24. VII. 1998.

シロチョウ科

ツマキチョウ：3♂，1♀，千石堀城址付近，上旬. IV. 1998.
キチョウ：1♂，能勢初谷溪谷，30. VII. 1992.

タテハチョウ科

(ジャノメチョウ亜科)

クロコノマチョウ：6♂，7♀，河内長野市天見，10. X - 4. XI. 1995.

(タテハチョウ亜科)

ルリタテハ：1♀，和泉葛城山，14. VI. 1992.
ヒオドシチョウ：1♀，和泉葛城山，11. VI. 1994；2♂，30. V. 1998.

イシガケチョウ：1♂，和泉葛城山，5. VIII. 1994；1♂，26. VII. 1998

オオムラサキ：2♂，東大阪市，枚岡公園，26. VI. 1997.

(マダラチョウ亜科)

アサギマダラ：1♂，和歌山県，護摩壇山，

24. VIII. 1991；1♀，25. VII. 1992；1♀，和泉葛城山，17. VIII. 1991；1♀，26. VII. 1992；2♀，9. VIII. 1992；1♀，15. VIII. 1992；1♂，11. VII. 1993.

(テングチョウ亜科)

テングチョウ：1ex.，和泉葛城山，14. IV. 1991；5exs.，5-9. VI. 1991；11exs.，13. VI. 1992.

シジミチョウ科

ムラサキシジミ：1♂，1♀，和泉葛城山 2. VIII. 1998.

(黒子 浩)

鳴く虫の声を聞く

秋の恒例の行事として、9月9日に、千石荘において、「秋の鳴く虫の声を聞く会」を開催しました。講師に、大阪市教育委員会の加納康嗣さんを迎え、約20名の市民の参加がありました。午後5時から、直翅類の中のキリギリス類、コオロギ類、バッタ類といったグループ間で、発音の仕方や産卵の仕方が異なるという話などを聞いた後、日が暮れて鳴き始めた虫たちの観察と採集を行いました。アオマツムシ、マツムシ、カンタンなどの鳴き声がよく聞かれました。また、加納さんが自宅で飼っていたクツワムシを持参され、その大きな声を聞くこともできました。以下に、当日に確認された直翅類のリストを報告します。☆印は、鳴き声を聞くことができた種を示しています。(岩崎 拓)

冬の近木川河口

水辺の鳥

2月27日(土)雨はあがったけれど、風が強く寒い。大阪市立自然史博物館の和田 岳学芸員を講師に、参加者32名(スタッフ5名)風が強く波があるためか、海に浮かぶガン・カモ類は少なかった。2月初旬飛来していたツクシガモも今は姿見せず。

カンムリカイツブリ

カワウ

コサギ

アオサギ

マガモ

カルガモ

コガモ

トビ

イソシギ

ユリカモメ

セグロカモメ

キジバト

ハクセキレイ

ビンズイ

ツグミ

メジロ

ホウジロ

アオジ

スズメ

ムクドリ

ハシボソガラス

以上21種 和田学芸員記録

バッタ目

コロギス科 ハネナシコロギス
 コオロギ科 アオマツムシ ☆
 ミツカドコオロギ ☆
 カネタタキ ☆
 マツムシ ☆
 カンタン ☆
 エンマコオロギ ☆

キリギリス科 オナガササキリ ☆
 ウマオイ(の一種) ☆
 セスジツユムシ ☆
 サトクダマキモドキ

バッタ科 ショウリョウバッタモドキ
 イボバッタ
 オンブバッタ
 ショウリョウバッタ
 ツチイナゴ

カマキリ目

カマキリ科 オオカマキリ

(岩崎 拓)

種名の訂正

遊学館だより、No.12、1997:6の「1997年少年自然の家合宿において採集された昆虫」のメイガ科マエクロモンシロノメイガをフタオビノメイガに訂正する。

(黒子 浩)

(白木 江都子)

第3回カニ釣り大会

とき： 1998年10月4日

ところ： 近木川河口

講師： 山西 良平氏

(大阪市立自然史博物館学芸員)

兎嶋 格氏(日本貝類学会会員)

参加者： 51名(自然遊学館スタッフ7名)

天候： 晴

今回も前回と同じ場所で行ったのですが、川原に生えているヨシが少なくなって、生息環境が変化したためか、カニの巣穴も少ない中でのカニ釣りでした。繁ったヨシがないため、カニの方から人の姿が丸見えで警戒心が強くなっている様で、なかなかエサのタクアンを食べてくれません。この悪コンディションの中、結果は散々でしたが、そのなかで健闘してくれた釣り人を発表します。

●ハマガニ

【♂】

1位 甲幅 41mm 金井 俊介

(全採集数1)

●クロベンケイガニ

【♂】

1位 甲幅 31mm 鈴子 勝也

2位 甲幅 30mm 鈴子 勝也

2位 甲幅 30mm 西村 静代

【♀】

1位 甲幅 28mm 二宮 龍祐

2位 甲幅 23mm 岡田恵太郎

(全採集数5、平均甲幅28.4mm)

●アシハラガニ

【♂】

1位 甲幅 30mm 金井 俊介

1位 甲幅 30mm 松谷 賢

3位 甲幅 29mm 金井 俊介

【♀】

1位 甲幅 28mm 金井 俊介

2位 甲幅 26mm 森田 美津子

3位 甲幅 24mm 二宮 龍祐

(全採集数10、平均甲幅25.8mm)

(山田 浩二)

ヘリトリマンジュウガニ採集記

岸和田高校1年 伊藤 誠

昨年の8月に二色の浜で海水浴中、突堤付近でこのカニを見つけました。岩の間にきれいに、はまっていたのでなにか大きなカニがいるのは分かりましたが捕らえるのは難しそうでした。そこで底の砂を掘って手を突っ込んで引きずり出しました。息継ぎをしながら10分間以上の格闘の末、傷だらけの手と一緒に出てきたのはピンク色の大きなカニでした。見たことのないカニだったので、家に持ち帰って乾燥標本にしました。図鑑で「ヘリトリマンジュウガニ」という変わった名前のカニとわかりました。それからは僕の宝物だったので、10月14日に偶然に宿題の生物のレポートを書くため、友達と自然遊学館を訪れたのがきっかけで僕のカニが珍しいものと知り、とても驚きました。

ブチサンショウウオ を探せ！

昨年(1998年)5月、和泉葛城山山頂付近の落ち葉の下でブチサンショウウオが採集されたことで、「やっぱり今でも貝塚にサンショウウオがいてるんやなあ」という話になりました。そして産卵シーズンを迎えたであろう2月28日、遊学館行事として、近木川支流の榎谷川上流にてブチサンショウウオ調査を行いました。調査隊に参加したのは、幼稚園児から大人まで31名。ゴム手袋にタモ網、飼育ケースを持った出で立ちで、谷筋に降りて石の裏、落ち葉のたまった淵などをなめるように調べながら、沢づたいにどンドン上流に登っていきました。サワガニやカワヨシノボリ、ヨコエビ、タゴガエル、様々な水生昆虫は見つかるものの、目当てのサンショウウオは卵囊も含め結局、最後まで見つかりませんでした。今回の収穫は、ムカシトンボのヤゴが3匹見つかったことです。普段誰も行かないような溪流で調査をした成果でしょう。

採集した水生昆虫の種類を以下に記します。

同定協力者 平峰 厚正
岩崎 拓

水生昆虫

トンボ目

カワトンボ科

ミヤマカワトンボ

ニシカワトンボ

ムカシトンボ科

ムカシトンボ

ヤンマ科

コシボソヤンマ

アミメカゲロウ目

ヘビトンボ科

ヤマトクロスジヘビトンボ

カゲロウ目

ヒラタカゲロウ科

クロタニガワカゲロウ

モンカゲロウ科

フタスジモンカゲロウ

カワゲラ目

カワゲラ科

コガタフタツメカワゲラ属の一種

トウゴウカワゲラ属の一種

フタツメカワゲラモドキ属の一種

コウチュウ目

ヒラタドロムシ科の一種

(山田 浩二)

泉州地域の水生生物を調べよう

私たちの住む泉州には、和泉山脈に源流を持ち大阪湾にそそぐ諸河川や、多くのため池、男里川に代表される河川河口部の干潟環境、大阪に唯一残された岬町の自然海岸等があり、比較的自然に恵まれています。そこで、この地域に生息する陸水および海岸の生物について理解を深めるため、調査・観察や、情報交換を積極的に行っていこうと思います。関心のある方は、御連絡下さい。

自然遊学館気付 泉州水生生物研究会 山田

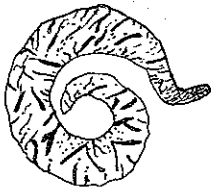
ブチサンショウウオについて

これまで貝塚市内において、ブチサンショウウオの生息確認は1971年に近木川の支流である榎谷川の上流で採集されたことと、昨年1998年に和泉葛城山頂付近で採集されたことの2例しかありません。サンショウウオの仲間は、近年の開発（河川の護岸工事等）による環境の悪化で個体数の減少が進み、何種かは日本の絶滅のおそれのある野生生物種に指定されています。

分類: 両生類 …… サンショウウオ目（有尾目）

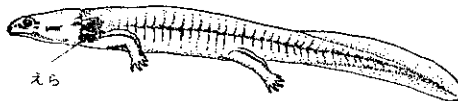
- サンショウウオ亜目
 - ・サンショウウオ科 …… **ブチサンショウウオ**
 - ・オオサンショウウオ科
- イモリ亜目

形態:



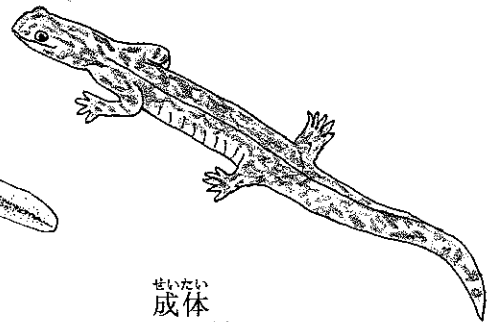
らんとう
卵嚢

丸く巻いたひも状で、
外皮はかなり硬い



ようせい
幼生

外エラを持ち、流れの
ゆるい水中で生活



せいたい
成体

全長 80-140mm
コケ状の灰色の斑紋がある

分布: 鈴鹿山脈以西の本州、四国、九州

生態: 標高300mから700mの丘陵地に多くいます。繁殖期は、2月下旬から4月頃で日光が差し込まない薄暗い溪流の細い流れや、伏流水中に体外受精によって産卵します。幼生はふさ状の外エラを持ち、また指先に爪が出来て流されないようになっています。それ以外の季節は雑木林の落ち葉の下などで生活していますが、詳しいことはまだ分かっていません。

● 調査にあたって ～ 溪流に住む生き物に思いやりを！～

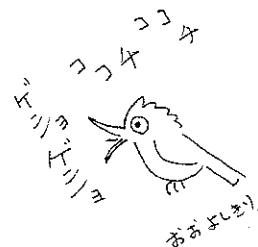
石と石の隙間は、水生昆虫、魚、カニなどにとってかっこうの住まいです。生き物へのダメージを最小限にするため、めくり返した石は元に戻しましょう。

しょうちゃんの一年間の活躍！

1998年度、主に近木川で観察したことを報告します。黒田祥子

春に目撃した事

- * ゴイサギ君がでっかいフナをむりやり飲み込む。
- * コサギ君に婚姻色が出ていた。
- * モズのお父ちゃんが巣立ち間もないヒナに餌を与えていた。
- * 平成大橋の下に、タウナギを発見。最初はゴミかと思ったが、どーもおかしいとにらみつけていると動きだした。しょうちゃんの眼力の勝利！
- * 林の木の上に黒い翼のかたまり、木の根元にはさぎの頭が転がっていた。食べたのはだーれ？
- * ツバメ、コシアカツバメを見かける。
- * アケビの花を初めて見て感激する。
- * 知らずに巣の近くを通り、巣を守るケリの親鳥ににらまれる。
- * オオヨシキリの雄叫びを聞く。口の中は真っ赤だった。鳴き過ぎではなかろうか
- * コアジサシの姿を見かけるようになった。ツバメに似てるけど違う。



夏に目撃した事

- * カワセミの幼鳥をなんと2羽もみちゃいました。
- * ダイサギとアマサギをみかける。親子かと思ってしまった。
- * ゴイサギコロニーでゴイサギたちの子育ての現場を目撃、近くにいって個体数を確認しようとするがオオスズメバチに追いかけられ、ほうほうのていでにげ帰る。
- * カイツブリの雛が親鳥の背中にちょこんとのっついて、ムチャかわいい。
- * バンの若鳥が元気良く走るのを目撃。もしかして、逃げているのかい？
- * ケリの集団を目撃。
- * セッカが「ひっひっひっ」と笑いながら飛んでいる。



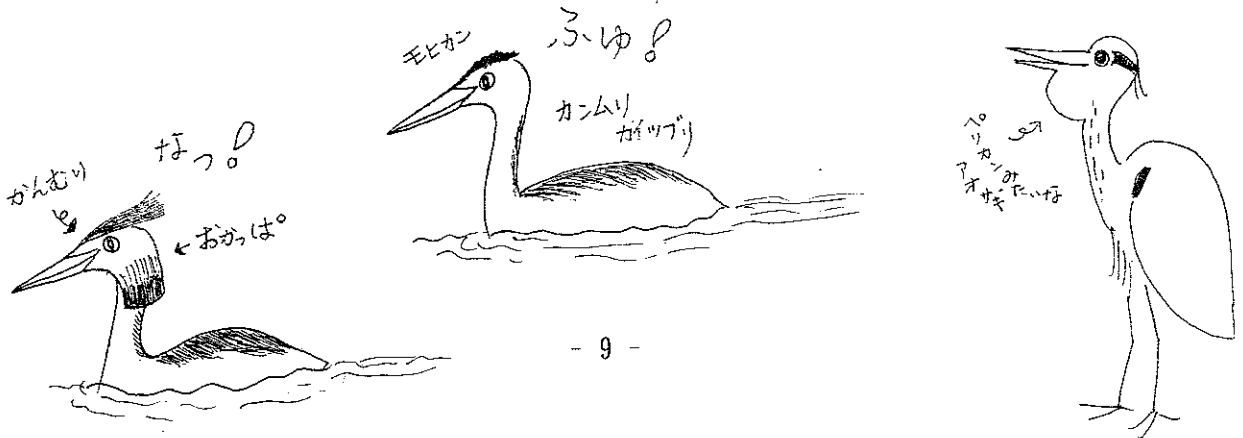
秋に目撃した事

- *あんなにたくさんいたコアジサシ、ツバメ、コシアカツバメがいつのまにかいなくなってしまった。
- *ハゲピヨ（ヒヨドリの若い奴）コゲラちゃんの餌の横取りを目論むのを目撃。
- *キビタキの雌の幼鳥を目撃。どーも幼鳥はわかりにくーてかなん。
- *ゴイサギ幼鳥何をしている？木の枝をくわえて水をつついている。
- *怪しいカメを発見！甲羅の色が黄色く頭は黒い。アカミミガメの雄で、雄は大きくなると耳の赤い色がなくなるんだそうだ。知らなかったなー。



冬に目撃した事

- *ツグミ、ジョウビタキ、セグロカモメなどの冬鳥を見かけて季節を感じる。
- *ササゴイの若鳥をちらりと見かけた。一年に1回会えるかどうか。
- *アオサギ海にてカレイを捕まえ、苦労して丸飲みする姿を思わず写真にとった
- *アオサギ若鳥とアオサギ成鳥がけんかをする！やっぱり大人にはかなわん。
- *カンムリカイツブリを見た。なんだか、モヒカンだった。夏ばねになると、冠のついたおかつぱ頭になる。
- *ヒドリガモをたくさんみかけた。かわいい。
- *コガモの雄はおもしろい顔をしている。
- *モズが食パンを食べているのを見た。はずかしいのか木に隠れて食べていた。
- *海岸にカニの多量の死体！しょうちゃん驚く。拾って遊学館にあわてて持っていったら、なんと抜け殻だとさ。なぜ同時に脱皮するかは、謎なそうな。
- *なんと！なんと！あの珍しいツクシガモを見た。くちばしが赤く、かわいかった。



自然遊学館だより

1999春号 No. 17
編 集 白 木 江都子
発 行 者 上久保 文貴
発 行 所 自然遊学館
貝塚市二色3-26-1